



Title	出張する博物館資料たち
Author(s)	持田, 誠
Description	総合博物館へ行こう. 第3回.
Citation	きぼうの虹, 325, 7-7
Issue Date	2009-11-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/39725
Type	article
File Information	mochida_kibou-3.pdf



総合博物館へ 行こう

第3回

出張する博物館資料たち

総合博物館
研究支援推進員

持田 誠



開館10周年を記念して「かでる2・7」で実施したサテライト展示。この夏、全国各地でこうしたミニ出張展示を行なった。

博物館資料は、展示室や収蔵庫に収まっているばかりではない。普段は見に来てもらう立場の資料たちが、見てもらうために出かけていく場合もある。今回は資料の出張について紹介する。

近代化の証人が一堂に

札幌の隣町小樽市には、小樽市総合博物館がある。同館の本館敷地は、元々は国鉄手宮線の手宮駅であった。さらに遡ると、一八八〇（明治十三）年に開業した官営幌内鉄道、すなわち北海道最初の鉄道の起点駅であり、一大鉄道基地だった場所である。一八八〇年といえば、札幌農学校第一期本科生が卒業した年であり、その歴史は古い。

現在、手宮線は廃線となった



小樽市へ出張した農具3点。普段は総合博物館2階に常設展示されている。

が、鉄道の街の歴史を伝えるべく、本館構内には鉄道施設や車輛が多数保存されている。そんななか、動態保存（実際に動く状態での保存のこと）されている蒸気機関車が、アイアンホース号と呼ばれるアメリカポーター社製3号機関車だ。テンダー式蒸気機関車の

動態保存機としては世界で最も古い部類に入り、今年でちょうど一〇〇歳を迎えた。これを記念して同館では、企画展「北海道の近代化とアメリカ お雇い外国人が残したものを開催（七月四日～十一月三日）。この企画展に、北海道大学総合博物館からもアメリカ直輸入の農具三器を貸し出して展示している（写真）。

北海道開拓の歴史を示す資料は、北大以外にもさまざまな場所に遺されている。「北海道の近代化とアメリカ」というテーマに関連した、近代史の生き証人たちを一堂に集めて展示することで、北海道史を具体的に振り返る良い機会を提供出来るのである。

上京する恐竜

総合博物館三階の「アイランド・アーク」と呼ばれる展示室には、ニッポノサウルスという恐竜の全身骨格標本レプリカが展示されている。ニッポノサウルスは約九〇〇〇年前の白亜紀後期に生息した恐竜である。当時日本領であった樺太の豊原、現在のロシア共和国サハリン州ユジノサハリンスクで、一九三四（昭和九）年、長尾巧によって発掘された。

このニッポノサウルスが、七月十八日～九月二七日まで、千葉県の幕張メッセ国際会議場で開催さ

れた「恐竜2009 砂漠の奇跡」に出品された。北海道から首都圏まで、津軽海峡を越えての出張である。

これだけ大型で、しかも壊れやすい資料の輸送には、特別な配慮が必要である。全身が収まる特製の輸送箱が作られ、美術品輸送特別仕様の大型トラックに積み込まれる（写真）。輸送に携わる運送会社の職員も、学芸員資格を持つ文化財輸送のプロフェッショナル

たちだ。

ところで、全身骨格が出張している間、主が不在の展示室はどうなっているのだろうか？実はこの期間こそ、本物の標本、それもタイプ標本が展示されていた。出張した全身骨格はレプリカ。これに対して、留守を預かっていたのは、普段は研究用として非公開の本物だった。出張展示の際には、送り出す側にも特別な展示が施される場合があるのだ。



ニッポノサウルスの搬出風景。美術品輸送の専門部隊が、技術の粋をかけて輸送中の資料を守る。